

特集  
里地  
～原風景を守り育てる～

Special Features  
Rural land  
Protecting and Nurturing Natural Scenery

里地デザイン手法  
Technique of designing rural land

## 町や村の元気をつくる「地元学」

地域と人の持っている力を引き出す

吉本 哲郎

YOSHIMOTO Tetsuro

地元学ネットワーク主宰



### 1—はじめに

「地元学」は地元学ぶことである。ないものねだりをやめてあるものを探し、地域の持っている力、人の持っている力を引き出し、あるものを新しく組み合わせ、ものづくり、生活づくり、地域づくりに役立てていく。それぞれの風土と暮らしの成り立ちの物語という個性を確認し、大地と人と自分に対する信頼を取り戻し、自分たちでやる力を身につけていく。

地元学は水俣病問題で苦しんだ水俣が、住民協働で環境に特化して行動し元気を取り戻した中から生まれた。もとより、地元学はこうであるという進め方はない。やり方すら、地元の土地と人に合わせ開発していくからである。従って水俣でやったことから最低限言えることにとどめていることをあらかじめお断りしておきたい。

最初に、環境都市水俣づくりのあるもの探しと水のゆくえの取り組みを紹介したい。次に住民主体による村丸ごと生活博物館、自分たちの地区の環境は自分たちで守る取り組みについて触れてみたい。最後に地元学と

は何か、私の考えていることを述べてみたい。

### 2—住民協働の環境都市水俣づくり

1991年、熊本県と水俣市はそれまでの政策を転換し、水俣病の犠牲を無駄にしないよう、水、ゴミ、食べ物にどこよりも気をつける環境都市水俣づくりを住民協働で始めていった。

1992年、水俣病犠牲者慰霊式の開催。1993年、水俣病を語る市民講座（今は語り部）の開催。住民参加による資源ごみの分別とごみ減量などが展開された。

2000年2月には、環境省と経済産業省によるエコタウンの認定を受け、循環型企業であるビンや家電のリサイクル工場など7社が立地し、120名の人たちが働くようになった。

政策転換から10年、「環境創造みなま推進事業」と呼ばれた取り組みは実を結び、水俣は環境都市に生まれ変わり、市民は胸を張って水俣出身といえるようになってきた。その取り組みは国内外の注目を集め、多くの

視察者が水俣を訪れてくるようになり、市民は誇りを取り戻した。「奇跡のようだ」と市民は語る。

患者である杉本栄子さんの言う「いじめた人様は変えられないから自分が変わる」に学び、水俣も就職や結婚がだめになり、農産物も水俣の名前では売れないなど40年もの長い間、嫌な目にあっていたけど、世間は変えられないから、水俣自らが変わったのである。

### 3—「地域資源マップ」と「水の経路図」

水俣再生はあるもの探しから始まった。1991年、住民の自治的組織「寄り会みなま」が26地区それぞれに誕生した。地区の自主的な活動を世話する世話人の集まりである。春の環境に関するいっせい寄り合いのあと、秋には地域資源マップづくりに入った。目的は行政をあてにしないで、自分たちで出来ることをやること、そのために地域にあるものを探して磨こうということだった。

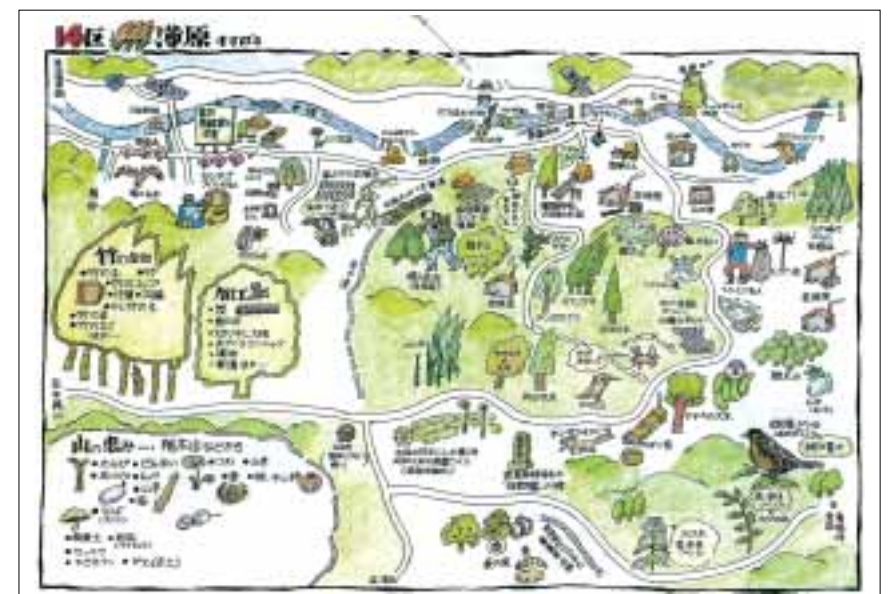
ある日、一人の代表者が来て私に言った。「うちの地区には何も無い」と。私は言った。「川や山、海には何が？大きな木はあるかい？鳥はどんなのが？」。するとウド、ワラビ、ゼンマイ、ウナギ、ハヤ、コイ、フナ、ガネ、ダクマなどが次々に出てきた。村人は「そんなのでいいんだったらいっぱいある」と言った。

調べてみたら「ケンボガナシが9本、オカメザサが4箇所ある。湯の児の海岸で夕日を見ながら飲むビールが一番うまい！」などがわかってきた。和ローソクの原料である榿蠟も、水俣が全国の30%を占めていることもわかった。「榿の木館」がつくれ、ローソクづくりがはじまった。何よりも、ないものねだりという愚痴をやめて、あるものを探して磨くという自治に変わったのが大きな効果だった。これ以降、寄り会みなまは、資源ごみの高度分別などで先頭に立ち、住民協働の水俣再生を進めた。

また1992年には、みんなで水俣26地区の、水のゆくえを調べた。川、用水路、洗い場、分水嶺、田、畑、

森、池、簡易水道や自家水源、そして水神さんや山の神などの場所を、1/2,500の地図に色塗りし水の経路図をつくった。調べて気づいたのは、村の佇まいは水がついていたことである。農業用水路よりも下の川のほうに田んぼが開かれ、用水路よりも山側の山すそに飲み水を求めて家がつくれ、家まわりに畑がある。見事な風景である。

村の人たちは決して美しい村をつくってきたわけではなくて、ここに生きるため、ここで生きるために、田を下に配置し、家と畑を山側においた。そのことが水による一定の秩序を村の風景に持たせたのである。あえて言えば生存風景である。それが結果として美しいのである。



■図1—地域資源マップ



■図2—水の経路図



■写真1—水俣病犠牲者鎮魂の火まつり



■写真2—住民参加による資源ゴミの分別

#### 4—住民主体、行政参加の「村丸ごと生活博物館」

水俣の最源流に、40世帯の頭石集落がある。親戚しか行かなかったところだけ3年半で1,600人を超える人たちが訪れるようになり、水俣で一番ホットなところになった。そのわけは、2002年8月5日に水俣独自の仕組みである「村丸ごと生活博物館」になって活動したからである。8名の生活学芸員がいて自分たちの暮らしを案内する。山菜取りや野菜づくりなどにいそむ15名の生活職人がいる。資格に必要なことは、ここには何もないと言わないことである。

生活学芸員と生活職人たちは「ここには何もない」と思わないように研修を受ける。研修は自分の家、家まわり、集落のことなど自分たちの暮らしを調べていく。地域にあるものを探して確認していく。地元学の実践である。あるものを写真にとって「この草木は何と呼んでいるの?」「何に使う?」など外の人たちが全てに驚いて質問して頭石集落にある暮らしの力を引き出していく。撮った写真を並べて絵地図づくりに入ると、地元の人たちは写真を食い入るように見つめている。いつも見ているはずなのに、場所がよくわからないのである。写真を撮ると、それまで見過ごしていた足下のささいなことに目がいくようになっていく。ないものではなく、足元にあるものに気づくまなざしが開発されていく。そして聞くことで見えなかった村の力が引き出されていく。

絵地図ができあがってきた。「森の番長」と題された山仕事歴40年の勝目辰夫さんの世界、無農薬の野菜をつくっている森下寛さん、地蜂を庭先で飼っている小島利春さん、煮しめ料理がひと味違うと評判になった村の女の人たちなど、頭石の暮らしの底力が立ち現れてくる。そして今、この絵地図を使って、訪れてくる人たちに生

活学芸員たちは笑顔で説明するようになった。案内するようになったら山を見る目が変わってきた。山に行くと食べ物がいっぱいあると気づくようになった。外から来た人たちがこのすばらしさを教えてくれる。草刈りしたりして村が化粧するようになった。トーフづくりセットや荷造りひもでつくった買い物かごが売れるようになった。2,500円で案内と食事を楽しんでもらい、1割は村に返している。それがもう30万円近くなった。何よりも村が元気になったと生活学芸員たちは語る。いい話だった。

頭石集落に住む人たちが足元に目を向けはじめた。遠くに幸せがあると思ってきたこれまでを振り返り、ここで生きるために、住んでいるここに目を向けはじめたのである。館長の役目を果たしているのは人望の厚い農業委員の勝目豊さんである。笑顔で村人たちを説得し生活博物館の動きを軌道にのせた。市は住民の自主的な動きを支えることに徹している。住民参加でなく住民が主役の取り組みである。行政は頭石地区の持っている力、住んでいる人たちの力を引き出す役割に徹している。行政参加である。

#### 5—地元学

##### (1) 「水俣だったら水俣づくり、地域づくりではなくて・・・」

多くの人たちは意外なことに、自分の住んでいる所を自分の言葉では説明できないものだ。自分のいる所をよく知らないことからおきることはアイデンティティ閉塞症である。自分や地域のことをよく知らないで外に出かけると、外にかぶれたり、あるいは拒否したりする過剰反応が起きる。変わりすぎて壊れたり、変われないであえぐことになる。地元学の一步は、自分と地域を説明できるようになることである。親の話を聞きなおすことからは

じめたいものだ。それが地元学である。自分の家の水の使い方、家まわりの有用植物、家庭菜園で年間46種類の野菜を一坪ずつ作り分けていること、先祖に供える花も植えていること、その野菜が倍近く



写真3—川がねとり(頭石地区)



写真4—頭石の味をふるまう



写真5—「村丸ごと生活博物館」頭石の人たち

つくれ、隣近所や親戚に配られていることなどに驚くはずだ。

水俣を歩くと、水俣は源流から海までを水俣市に持つ水俣川流域の町だったこと、そこに起きた歴史は日本の工業による都市化を典型的に見ることができること、だから水俣は日本のすべてをギュッと縮めたようなところだったことがわかってきた。すると環境の21世紀を水俣の世紀にしていく方向が浮かんできた。水、ごみ、食べ物に気がついた水俣づくりが始まった。

##### (2) 地元学のすすめ方

地元学は活かすために自分たちで調べる。調べて考えて、地域づくりだけでなく、物づくりや、生活づくりに役立てていく。

地元学には二段階ある。一つは基礎的な地元学である。水のゆくえを調べながら、地域にありとあらゆるものを探すやり方である。あるものを写真にとり、一つひとつ地元の人に聞いて記録していく。次に調べて驚いたこと、気づいたことを絵地図にして見やすくしていく。その絵地図を見て、これはどういうことなのか、さらに考えて気づいたことを書き込む。できあがってくる絵地図は家庭菜園、石使いなど様々である。それから、家庭菜園はおばあちゃんたちが健康で長生きするための仕事場だったことなど、見えるものからそれまで観えていなかったことにたどり着いていく。

次に応用段階の地元学である。水俣で実践した生活の旅(グリーンツーリズム)の基礎資料にしたり、水俣独自の「村丸ごと生活博物館」の研修と生活学芸員たちの村案内に使ったり、「食の地元学」とか「水の地元学」など、課題を決めて調べるやり方である。どちらから先にやってもいいけど、広く調べてから、課題で絞り込んでやったほうが深みと広がりがある。

##### (3) 地元学の広がり

地元学は水俣に生まれ、岩手県陸前高田市で育ち、三重県で「三重ふるさと学」となり全国に広がった。広がるわけには何があるのだろうか。これまで遠くに幸せがあると思ってきた、都会を見て暮らしてきた。でも、夜逃げの町だった宮崎県綾町を見事に再生した郷田實前綾町長が「田舎は田舎をつくれればいいんだ、都会に背を向けて」と言ったように、足元を見直して地域をつくっていくことが求められる。しかし地元を見直す有効な手法が

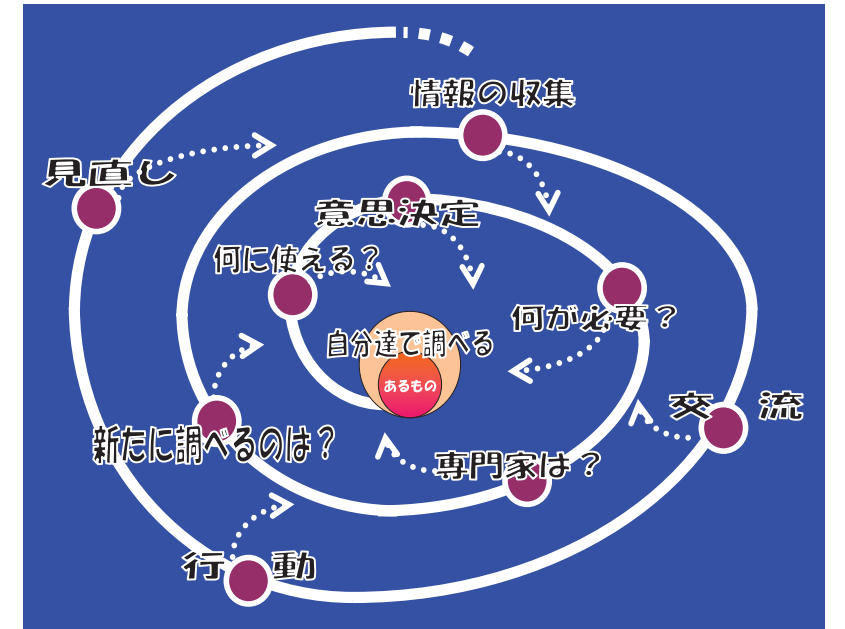


図3—地元で学ぶ地元学の進め方

なかった。地元学は地元を見直す一つの手法の提供である。

問題は誰がやるのかである。地元学は地元の人たちが主役である。しかし地元だけでは独りよがりになるから外から来る風の人たちといっしょに行く。風の人たちは決して教えずに、驚いて問いを發し、地域の持っている力、人の持っている力を引き出していく。地元学は地域の底力を引き出すのである。それも活かすために。また物づくり、地域づくりや生活づくりなど地域の暮らしを楽しむために行く。

「当たり前って当たり前でないんですね。知らなかった」とあるように、地域の底力を引き出し活かすため、小さな世界に目を凝らし調べること、そのための手法の提供が地元学の大きな特徴である。

#### 6—おわりに

地元学は、人と地域の自然と経済が元気な町や村をつくることを目的としている。ただし、経済は三つでとらえている。お金の貨幣経済、「結い」や「もやい」という共同する経済、家庭菜園などで自給する自給自足の経済である。

三つの元気と三つの経済をそれぞれの地域でどのように整えていくかが問われている。哲学者ニーチェは「足元を深く掘れ、そこに知恵の泉が湧く」と語っている。足元を知り、あるものを探し、あるものとあるものを新しく組み合わせ、常に新しいものをつくる力、自分たちでやる力を身につけることが地域の元気づくりの始まりにある。ここに生きる希望づくりである。